

神々しいヒマラヤの山々が歓迎（中央がマチャプチュレ山）



## ◆ネパール訪問記◆

# 神々しいヒマラヤに 魅せられて

今回は、5月の連休を利用して、5月3日から8日まで、JC労働リダーシップ西日本コースの校長をお願いしている平田哲アジアボラン

ティアセンター(AVC)代表のネパール訪問に、JC本部の若松英幸事務局長と渡辺美知夫の2名がプライベートで同行させていただいた。ネパールで、FEDO(フェミニスト・ダリッド協会)とアスマン・ネパールの2つの現地NGOと交流、現地状況の調査も行ったので、レポートする。

ネパールには、日本からの直行便はない。5月3日に関西空港から一旦タイ・バンコクに到着、一泊して翌日5月4日ネパールの首都カトマンズに午後到着、その足で、AVCの現地カウンターパートNGOであるFEDO(フェミニストダリッド協会)本部を訪問した。

## 現地NGO『FEDO』の 新本部を訪問

FEDOは、ダリッド(被差別カースト)の女性により1994年に設立された。カーストとジェンダーの二重差別に苦しむ女性たちのエン



FEDOのドウルガ代表に寄付金を手渡す若松次長

パワーメントと権利回復・生活向上のための教育、保健衛生、収入向上、啓発活動、政策提言などを行っている現地NGOである。

FEDO本部は、カトマンズ市内の南部に位置している。最近、事務所を移転し、事務所内をリフォームしたところだ。移転・リフォーム費用は10万ドルだったが、その半分は銀行から借りたとのことだ。今度の新しい本部には、宿泊施設を備えた女性の教育センター、リソースセンターの建設を計画しているとのこと。FEDOの活動の一助にと3人で個人的に3000ドルの寄付を若松次長からアルジェ代表に手渡した。

平田AVC代表が挨拶に立ち、「アジアボランティアセンターとして、FEDOとの間に、5年間の協力計画書を締結して、相互に協力しながら



FEDOの新本部を訪問（中央がAVCの平田代表）

らボランティア活動を進めてきたが、この5年間、着実に実績をあげてきたと評価している。AVCとしては、引き続き新たな5年間の協力計画書を締結して、更に協力関係を継続していきたい」とAVCとFEDOとの協力関係の維持・継続への意欲を述べた。

FEDO代表であるドウルガ女史は、最近のFEDOの活動状況について以下のように語った。「AVCのこの5年間の支援に対して心から感謝するとともに、引き続き、AVCの協力・支援を心からお願いたい。この本部事務所を併設した教育研修所を建設する計画である。FEDOはネパール国内30地域に支部を持って、啓発活動、教育活動、所得向上のためのグループ貯金活動、保健・公衆衛生活動などを展開してい



## FEDOの紹介

- ◆ 正式名称：フェミニスト・ダリット協会 (Feminist Dalit Organization)
- ◆ 職員数：45名 (2005年8月現在)。現在、ネパールの30郡 (75郡中) 郡委員会があり、会員は6000人。中央委員会を含めて23の委員会の理事は185人。全部で300グループある。受益者は45000人。
- ◆ 活動地域：ダリットの多い平野部や中西部、極西部地域が中心。
- ◆ 活動内容：ダリット (抑圧された者) と呼ばれる被差別カーストの女性達によって設立された団体。カーストとジェンダーの二重の差別に苦しむダリット女性たちの能力向上と自立をめざして、主に啓発、教育活所得向上、保健・公衆衛生などの活動をしている。
- ◆ 啓発活動：社会的差別を受け、困難な立場にいるダリットの人々の現状や、カースト及びジェンダーによる差別の撤廃を、ワークショップやセミナーを通して広く社会に啓発。また、ダリットの女性、男性に対しても、自分たちの置かれている状況や、本来保障されるべき権利などについての啓蒙プログラムを実施。
- ◆ 教育：多くのダリットの女性が非識字であり、このことが社会活動に参画できない一因となっている。FEDOは識字こそが様々な活動のエントリーポイントと位置づけ、ダリット女性グループや学校に行けない子供たちを対象に、インフォーマル教育を行っている。さらに、高校や職業学校に行くための奨学金も供与している。その他、助産士や保健士など、地域社会の将来を担う人材の育成も行っている。
- ◆ 所得向上：ダリットの女性たちがグループを結成した後、生産的な活動に従事できるように、様々な研修を受けられるようにしている。特にFEDOはこれらのグループに少額の回転資金を供与し、高利貸しを利用なくすむグループ貯金活動を推進している。また、帳簿の付け方など必要な技術を教えて、グループが自己資金で家畜飼育、野菜生産などの活動を行い、所得が向上するように指導している。
- ◆ 保健・公衆衛生：安全な飲料水を確保するための水道事業や、トイレの設置を行い、これらの事業と同時に病気予防や衛生についても指導し、ダリットの健康状態の改善を目指している。

## ネパールの労働一口メモ

- ◎学校の教師の月給：1万円位
- ◎バス：5ルピー～8ルピー (10円から16円) で市内のどこにでも行ける。
- ◎NGOの新入社員の月給：約1万5千円
- ◎タクシー初乗り：8ルピー (約16円)
- ◎平均寿命は55～56歳

## 喧噪のパノラマ写真売りの少年達

朝食の時間までベッドでうとうと

うに静かだった。

翌朝5月5日5時すぎ、あたりが薄ぼんやりとしてきたので、日の出を見ようとベランダに出た。エベレストなどヒマラヤは雲がかすんで見えなかったが、太陽がオレンジ色の顔を見せ、山々はかすんで水墨画のように幻想的だった。ベランダのイスにこしかけ、耳を澄ますと、聞こえるのは時折の鳥のさえずりのみ。少しづつ日が昇る幻想の瞬間だ。なかなか味わい深い朝のひとつだった。5時半過ぎ、若松さんも隣の部屋のベランダに姿を見せた。喧噪の町カトマンズから35km離れたナガルコットの山頂のペンションは嘘のよう

る。ネパールの経済状況は少し良くなっている。政治情勢は、まもなく新憲法を制定する過程にある。そういう中で、FEDOの活動を再開させたところだ」

## ナガルコットの山頂から

5月4日 (金) FEDO訪問後、

元アジアボランティアセンターの職員で現在、駐ネパールの日本大使館で勤務されている山本愛さんも案内



家の壁に使う土を袋に詰める姉妹(ナガルコット)

役で加わり、4人でネパールを旅した。運が良く晴れていればエベレストが見れるというナガルコットの山頂のホテルへ出発。道路は途中からは舗装もされておらず、山道をミニバスで飛ばす。まるでジェットコースターのように、断崖絶壁の悪路、スリル満点の1時間半程のドライブだった。

日本人とネパール人の共同経営の山頂のペンション「NIVA NIV」に到着。夕食は、お弁当スタイルで、和食とネパール食のあいのこという感じ。地ビールのエベレストビールで乾杯したが、口当たりが軽く意外においしいのにはビックリ。バンコクからカトマンズに空路移動して、またカトマンズからナガルコットに車で移動して、みんなくたくた。午後10時前には、みんなダウンして各自の部屋へ。ナガルコットのペンションは部屋にテレビもなく、標高2300メートルの山間に建てられている。

していると、7時半頃、ドアをどんと叩く音、何かと思つたら、平田先生が、「下の裏庭で、ヒマラヤのパノラマ写真を売っているからお土産に最高だから買いなさい」と元氣一杯の声。昨晩はビールを少し飲んだら、すぐにダウンされたのに一晩ゆっくり休んだら、もうエンジン全開。すぐに身支度して下に降りて1階の食堂前のペランダに出ると、待っていた10人くらいの物売りの少年達が、我先にと何かを叫びながら多分「こっちの買ってよ」、「こっちのが最高だよ」などと叫びながら、ヒマラヤのパノラマ写真を売りに群がってくる。すさまじい熱気に負けて、1本200ルピーで10本買った。合計2000ルピー。「少しまけるように言ってもいいですか」と平田先生に聞いたら、「こんな山の上で商売しているんだから大変なんだ。少しでもみんなが潤うように、200ルピーで買って上げた方がいいよ」と。私も「はい、わかりました」と。先生も10本買われていた。同行してくださった山本愛さんも半分あきれ顔だった。

## 朝食後の散歩〜ミルク缶運び人とすれ違う

朝食後、4人で散歩に出かけた。山道を小一時間歩いた。平田先生は途中でリタイア。途中でミルク缶運



急峻な山道を黙々と歩むミルク缶運び人

びの男達と何人もすれ違った。聞けば毎日、麓の自分の家で飼っている山羊の乳を搾って、金属製の器に入れて背中に担いで、一山越えたところにあるチーズ工場に持って行くのだという。その手間賃が一本運んで(多分3〜4時間以上はかかるだろう)150ルピー(約300円)という。大変な重労働でもかも裸足の人も多い。次に渡辺と山本さんが立ち止まった。若松さんははるか山の下の方の小学校まで行って手を振っていた。その健脚ぶりには脱帽。

## 静寂の地ナガルコットから喧噪のカトマンズへ

朝9時半、ベンシヨンを出発。フロントの人や従業員の方が見送ってくれた。みんなとても親切で気持ち良かった。運転手さんに、日本から持ってきた一口羊羹とチップのお金を上げたら、とても喜んでくれた。途

中、山の上の小さな集落の市場で車から降りて、少し歩いてみた。若松が八百屋でミカンを買ったら、近所の人たちが物珍しそうにみんなで寄ってきた。肉屋の店頭には毛皮をはがされた山羊の頭が二つ置かれていた。には度肝を抜かれた。でこぼこ道を降りて、一路カトマンズの飛行場へ。飛行場近くの道路は、車とバス



八百屋でみかんを買うと人だかりが(右が若松氏)



喧噪に満ちたカトマンズ市内の道路

## 神々の宿るヒマラヤに近い町ポカラ

カトマンズ空港から空路30分、ヒマラヤのよく見える、トレッキングの出发点として有名なポカラの町に到着。5月は、雲が多く、万年雪を抱いたヒマラヤの山々はめつたに拝むことはできないとのことだ。晴れ男の若松さんに期待しつつも、半分あきらめ気分もあり、マチャプチュレ(フィッシュテール..魚の尻尾)というヒマラヤの山の名前をとったホテルで眠りについた。

5月6日早朝、太陽の光で目が覚めた。何か予感がしたが、着替えて、ホテルの一番眺望の良いポイントに行く。ヨーロッパの観光客たちが、もう10人くらい来て、眼前の湖ごしに山を眺めていた。その方向に目をやると、山々のさらに奥の方に、真白い、神々しいまでに厳かなヒマラヤの山々がその姿を見せていた。そ



ヒマラヤの山々を背景に（中央が平田代表）

の真ん中にあるマッターホルンに似た山がこのホテルの名前にもなっているマチャプチュレだ。正面から見るとがって見えるが、側面から見ると、魚の尻尾みたいに真ん中がえぐれているとのことだ。午前中の観光地めぐりを変更して、ヒマラヤがさらに鮮明に見えるという山サランコットの山腹まで車で行き、そこから徒歩で眺めのいい地点まで登った。土産物店の人からも、あなた達は運がいいね、昨日まで雲がかかって何週間もヒマラヤを見ることができなかったとのこと。その日の午前中は、ヒマラヤの山々を飽きずに見て、過ごした。ネパールの標語に「祖国は天国より素晴らしい」との言葉があるが、確かにこの神々しいヒマラヤの姿を見ているとちっぽけな人間界の些末なできごとなどバカらしくなってしまう。午後になるともうヒヤ

ラヤは白い雲海の中に姿を消してしまい、滞在中その姿を見せることはなかった。6日晚には、ポカラの韓国料理店で、JICAからダム建設の現地説明会のために派遣されている清泉女子大学の真崎克彦助教と夕食を一緒にとり、懇談した。

## 再びカトマンズへ、そしてアスマンネパールへ

5月7日午後、ポカラでのヒマラヤ見学を終え、再び空路、喧噪の町カトマンズに戻り、現地のNGOアスマンネパールの事務所を訪問、活動状況についてレクチャーを受けた。まだAVCとの交流・協力実績はないが、AVC代表が見えるというのが、先方からの来所の要請にこたえたものだ。

アスマンネパール(ASN)は、今から18年前にアメリカの女性教育者によって設立されたNGO。組織目標として、①児童労働の廃絶、子供教育の徹底と普及促進、②村落、地域、地方レベルでの出生届の登録の促進、③幼児婚の廃止と意識づくり、④子供の健康状態の向上を掲げ、計画と実行に基づき、開発と子供の権利保障を率先して行ってきたNGOである。この中には、女性グループ、青少年団、学校運営委員会、牧師、地域組織、他のステークホルダーなど地域支援組織との活動も含ま

れる。ASNはネパールのダヌーシヤ、マホタリ、サルラヒ地方の64の村落委員会において、115以上の政府学校と5歳から14歳の6万6945人の子供たちを相手に活動している。ASNの主な成果としては、3つの地方における、就学率の向上、出生登録数の上昇、学校における学習環境の改善、図書館の増設、栄養失調児の減少が上げられる。

平田代表の、「ネパールの貧しいコミュニティの人々のいる中で、何に一番力をいれているのか」との質問に対して、「地域の共同体に接して、両親のみでなく、子供をとりまく全てのステークホルダーとの共同作業で、現地の文化や地域コミュニティを尊重して、児童労働の廃絶と児童教育の徹底のために、教師や青年団リーダーづくりを行っている」。平田代表「実際、現場で活動しているリーダーの育成をどうやっているのか」との質問には、「組織の中にもいるが、外部のリーダーも呼んで指導してもらっている」との答えがあった。今後の交流を期待しつつ、再会を約して事務所を辞した。

カトマンズ最後の晩は、初日にお会いしたFEDOの代表ドウルガ女史ら4人にネパールの郷土舞踊を鑑賞しながら、郷土料理に舌鼓を打った。ネパールは、仏教発祥の地である



ネパール最後の晩、FEDO代表からネパール料理をごちそうになる（カトマンズ）

が、現在は隣国インドと同様、ヒンズー教が国教となっている。ヒンズー教の教え自体が、カースト制度とジェンダーで女性を差別することを保護している。何故なのか、考えた。それは、昔から女性の力が強かった。女性に太刀打ちできないことがわかっていたので、このような教えを作らないとダメだったのかもしれない。でも、女性はそんなことでは黙っていない。FEDOを中心とする女性の地位を向上させるNGOのパワーを見せつけられた感じがした。もう一つ、ネパールの国で思ったことは、水の大切さだ。上下水道をきちんと整備していないので、全て垂れ流しの状態だ。やがて汚物が充満し、とんでもない結果となることは自明の理だ。開発援助も先を読んだ支援が大切と痛感した。(渡辺美知夫記)